くすりの散歩道

紫根

紫雲膏の原料、今や絶滅の危機

新潟薬科大学 学長／千葉大学 名誉教授
山崎　幹夫
Mikio Yamazaki

●

いきなりの私事で恐縮だが、私が卒業した東京都立高等学校の校章は、ムラサキの花をかたどったものであって、私には、常に帽子や襟にムラサキの花の校章をつけて過ごした青春のひとときがあった。

●

当時、ムラサキは武蔵野を代表する植物であると学校で教えられた。また、ムラサキの根からは紫色の色素が得られ、紫色は古今、洋の東西を問わず高貴な色とされ、最高位、高官の人以外は紫色の衣を身につけることができなかったとも教えられた。住まいについても同じで、京都御所の紫宸殿は内裏における正殿であり、正面に左近の桜、右近の橘を配し、即位の儀式が執り行われた宮殿であった。また中国皇帝の住まい、紫禁城にも、高貴の色である紫の字が使われている。

●

高貴の色を採るムラサキはムラサキ科の多年草で、丘陵、草原など比較的明るい場所に生育する。白色で平たく開く5弁の花冠をもつ花は6～7月に開花する。根は円錐形に太く長く何本にも分岐して、表面は紫色を帯びている。前述したように、かつては武蔵野にも自生し、平安時代には染料植物として関東からわざわざ京の都にまで運ばれたらしいが、いまは東京周辺では武蔵野自体が消滅しており、ムラサキの自生を見かけることはほとんどない。

●

大学院時代のある年、級友が紫根の紫色成分シコニンの研究をすることになり、私たちは協力して、都内の目白にお住まいであった恩師（柴田承二 現東大名誉教授）のご自宅でムラサキを栽培すべく（教授ご自身の発案で）、庭の芝生を掘り起こしたことがあった。その結果、たしかにムラサキの白い花を見た記憶はあるのだが、期待通りの太い根が収穫されたかどうかの記憶はない。

●

ムラサキは、当時、八ヶ岳のふもと、野辺山の辺りにも採取に出かけた記憶がある。ここにあった東京大学の高原薬用植物農場には、当時試行中であった大黄栽培の様子などを観察するために何度も泊り込みで通ったが、当時、山登りに熱中していた私には、八ヶ岳の各峰に登るルートばかりに気をとられて、ここでのムラサキの採取あるいは栽培に関する成果についての定かな記憶がない。ただ、当時はムラサキといえば同属異種で色素を生産しない外来のセイヨウムラサキが盛んに頒布されており、本来の薬用ムラサキを確保することが難しかったことは確かである。

●

紫根（紫草）は『本草神農経』では中品に属し、「心腹の邪気を払い五疳を治し、中を補い、気を益す」とされている。味は苦で寒。消炎、解熱、解毒の効があって内服もされるが、ひび、あかぎれ、しもやけ、あせも、ただれ、火傷、痔などにも薬効があるとされて、華岡青洲の処方と伝えられる外用薬「紫雲膏」はいまでも製造、販売されている。最近はしもやけの子を見かけることもなくなったが、私が子供の時代には、ほとんどの子、炊事洗濯をする主婦は日々あかぎれやしもやけに悩まされていた。そんな時に、赤紫色をした紫雲膏は私たちの強い味方であり、また近くの大抵の薬局で気軽に買うことができた。

●

紫雲膏は日本薬局方の薬局製剤として認められており、定められた処方としては紫根120g、当帰60g、胡麻油1,000g、黄蝋（蜜蝋）340gに豚脂20gが加えられている。この処方の基準になる華岡青洲の紫雲膏は、もともと中国、明の時代に陳実功が著した『外科正宗』にある「潤肌膏」に豚脂を加えたものであるとされている。ともに薬効としては禿瘡（白癬、シラクモ）、白斑、脱毛などが挙げられているが、日本薬局方では前述したあかぎれ、しもやけなどの他にかぶれ、魚の目、火傷、外傷、痔の疼痛、肛門の裂傷などへの適用ができるとされている。

●

紫雲膏の処方（各生薬の配合量）や製法については、市場品のそれぞれにいろいろな工夫があるようであるが、優良原料生薬の選別使用、製法上の工夫、例えばシコニン（アセチルシコニン）抽出含量の差などの違いなどは効能・効果にも影響を及ぼすのではないかと思われる。

●

シコニンの薬理作用としては殺菌作用の他に毛細血管透過性の亢進、浮腫の抑制、肉芽形成の促進などが知られており、紫雲膏の効能・効果と矛盾しない。ちなみに、紫根の成分としてシコニンを分離同定したのは女性理学博士第1号とされる黒田チカ博士で、1918年（大正7年）に発表された論文「紫根の色素について」の研究成果として知られている。

●

本文の終わりにあたってまたまた私事で恐縮だが、少年のころ、上野公園で見かけた「くすり売り」の香具師が怪しげな瓶入りの軟膏を掲げ、「この薬こそは、かの有名な理学博士黒田チカ先生の発明になるところの、すべての傷をタチドコロに治す万病の薬」といった口上が、そのときの情景とともに私には忘れられない。